



# ondo

the heat,  
the wave,  
and .....

The things  
I keep on loosing

## 詞

---

君の心に詞（コトバ）の雨を  
降らせ満たし溢れさせ  
君の汚いモノいらないモノ棄てられないモノ  
すべて洗い流してあげましょう  
もしも必要な大事なたったひとつのモノ  
それまで流してしまっても  
どうかそれはご容赦を  
僕は雨を降らせただけ  
飛び込むか雨宿りするか傘を差すかは  
君しだい  
僕の言葉にどう応えるかは  
君しだい  
この詞の海にこだまするリズムが  
君をどう揺さぶるのか  
それだけが僕の嬉しい懸案だ

## vicissitudinous blue

---

きみは空のような人だった  
光り輝く青空の青  
一面の青  
変わることはない、青。

僕は海のようにだと君は言った  
光り輝く大洋の青  
一面の青  
変わることはない、青。

君は気づいていただろうか  
海の青は空の青だったって  
僕の色は君の色だったって

君がいたから  
君が変わることなく青かったから  
僕はずっと  
君のようにいられたっていうのに

僕が欲しかったのは  
君のその輝く青

僕の持つ  
この黒と見まがうような色ではなくて。

## Butterfly

---

ふわり

僕の心をかすめた蝶

この世のものではない美しさが

僕の心を一瞬で捉えて

飛び去っていった

手を伸ばしてももう遅く

姿を思い出そうとしても

おぼろげにしか思い出せない

ふわり

僕の心をかすめた蝶

いったいあの羽は

どこへ向かっていたのか

いったいあの羽は

どんな輝きを持っていたのか

## ANOTHER MIND (後朝)

---

これはもうダメかもって思ったんだ  
目が覚めて  
隣で眠る君の横顔を見たとき  
訳もなく

朝が来たら  
どんな顔をすればいいんだろう  
朝が来たら  
君になんて言えばいいんだろう

月明かりに照らされた  
君の頬に  
くちびるを寄せてみても  
心は1ミリも動かない

寝返りをうった  
その先のシーツが  
僕を冷やしてゆくんだ  
ゆっくりと

心までも

訳もなく来た  
この終わりの予感に  
涙も出ないよ  
理由なんてないんだから

## 熱い香り

---

あなたが残したこの熱が  
この身にはりついてまだ香るうちは  
あなたのものでしょう  
あなたのためにどんな無茶も  
他人の呆れるような馬鹿も  
あなたのものであるうちは  
あなたの一部として働こうじゃありませんか

けれどこの香りはすぐに冷める  
冷たい私の肌はすぐにあなたをさまして  
私のこの身を包み込む  
あなたを思い出せないのは  
あなたを忘れたくないのは  
あなたのものでいたいから  
あなたに私の一部になってほしいから

指先から飛び立ってゆく熱  
逃がすまいと慌てて触れた  
その肌を切り裂かんばかりの冷たさといったら

## cure

---

やっと

やっと人生で初めて

何が何でも救ってあげたい人に出会えたのに

どうして

どうしてそのときになってはじめて

僕の体は毒しかもっていないことに気付くんだろう

## 迂路

---

ずいぶんとまわり道をした僕ら  
日はとうに暮れて星が空に踊る  
君は帰り道で覚えたあのステップを  
三歩うしろの僕は笑いながらそれを見る  
街灯のスポットの下 君はまるで女優のようで

ずいぶんとまわり道をした僕ら  
どんなに寒くても お互いの手があればよかった  
僕はタバコの煙と下手くそなラブソングで  
すぐ隣で笑っている君を包む  
街灯のスポットの下 君はずっと何かに耐えて

僕らが歩いたあの道は  
今も変わらずあるはずなのに  
いつの間にか行き方を忘れてしまって  
手分けして探しているうちに  
僕らの手も いつの間にか分かれてしまった

最後にあの道で君の手を  
離してしまったときの後悔は  
今も僕と一緒に歩き続けている  
君と同じ顔をしたその後悔は  
僕の三歩後ろで いつも僕を見つめている

ずいぶんとまわり道をした僕ら  
涙はとうに枯れ 君ははるかかなた  
帰り道の君のあのステップ  
帰り道の僕のあのラブソング  
そのリズムと僕らの笑い声が  
街灯のスポットの下 今も踊ってる

## スピード

---

ああ こんな胸の痛みなんて  
すべて吹き飛ばしてしまおうよ  
この時速100kmの優しさで  
オレンジの光の中で  
夜はどこまでも僕たちに微笑んでるし  
僕らの耳に届くのは僕らが大好きな歌だけ  
このビートに溺れながら  
明日なんてものは向こう岸に  
この今だけをこちら側に  
あのオレンジの光だけが  
今の僕らの道しるべ  
目指すところは何もないさ  
僕らがこうしている理由と同じ  
今はこのスピードだけがあればいい  
この 優しく激しいスピードだけが。

なみ、だ

---

僕の目を曇らせていたのは  
間違いなく あの日々だったワケで  
僕は今 やっと自由なワケで  
もう あんな想いなんか  
海にでも捨ててしまえ

なのに 海に来てみたら  
寄せては返す塩辛い水ばかりが  
青く光っていて

こんなの 涙と同じじゃないか  
地球の七割を覆い尽くす涙  
それは 僕も覆い尽くして

ぶり返した なみだ  
ぶり返した 波だ

なんだよ

やっと

捨てられるって思ってたのに

## fly high

---

もうすぐさ

あの光の下には幸せの匂いが満ちている

背中にまとわりつく

青白いまなざしなんて振り切って

あの光まで駆け抜けろ

もうすぐさ

あの光の下には幸せの匂いが満ちている

水底から響くような青白い声も

心の中身まで吹き飛ばしそうな十月の風も

誰も このスピードは止められない

あの光の下に待っている

あの優しい幸せの匂いを頼りに

この暗闇を駆け抜けろ

この孤独を駆け抜けろ

ただひたすらに、翔けてゆけ。

## レイン

---

雨が屋根をたたくりズムを  
私は祈るような気持ちで聞いている

この雨が止まなければいい  
そうすれば私はあの人に傘を差し出せる  
肩を寄せて歩くことができる  
自分が濡れたってかまわない  
泥水にまみれたっていい

あの人を私が必要に思うなら  
雨が降るたびに私のことを思い出してくれるなら

この雨が止まなければいい  
あの人をずぶぬれにしてやることができる  
私の気持ちをわからせてやれる  
痛みの雨の中に立ち尽くす  
この冷たさを少しでも味わえばいい

この雨が止まなければいい  
何もかもをずぶぬれにするまで

あの人を私が恨めしく思うなら  
雨が降るたびに私のことを思い出してくれるなら

でも  
雨にぬれたあの人を乾かすのは  
私じゃない

たとえこの雨が止んだとしても。

## 試練

---

触れようとした声も  
聞きたかった声も  
吸い込みたかった香りも  
私の欲しかったものは何も  
そこにはなくて  
かわりにあったのは  
触れなくなかった現実と  
聞きたくない現実と  
吸い込んでも吸った気のしない空気

それでも笑っていられた私を  
神様は、褒めてくれますか？

## ゲーム

---

どこにぶつけられるという訳でもない  
どうしようもなく情けないこの衝動を  
持て余している時に限って  
きみはとても残酷で  
きみに伸ばしたくてたまらないこの手を  
ぼくは血の滲む思いで握りしめる  
きみの伸ばす手はぼくに触れない  
触れはしない  
触れやしない  
きみはぼくを試したいから  
わざわざぼくに触れる必要もないから  
いつもぼくが手を伸ばせば触れることのできる位置で  
きみは優雅にお茶しながら待っている  
きみはぼくに触らない  
ぼくはきみに触れない  
その緊張感がぼくを虜にする  
これは大人の我慢比べ  
世界で一番スリリングなゲーム  
自分の欲望に素直な人間は勝ち残れない  
自分の衝動を押さえ込んだ人間は泣きを見る  
そんな哀しいゲーム

## 深夜のレストラン

---

僕はタバコに火をつけて  
いらだちを吐き出している  
君はタバコに火をつけて  
ため息を煙でまぶしている

ため息といらだちが交じり合い  
安っぽいBGMの中に消えていく  
そんな深夜のレストラン

二人が共有しているのは  
テーブルの上の灰皿だけ  
そんな深夜のレストラン

僕らは視線だけで会話する  
煙に細められた目で  
いぶされたいぶかしげな目

お互いの声は相手に届かない  
だって君と僕との間には  
二種類のタバコの織り成す山

僕はタバコに火をつけて  
いらだちを吐き出している  
君はタバコに火をつけて  
ため息を煙でまぶしている

そんな深夜のレストラン

タバコの煙だけが  
ただもくもくと  
黙々と  
二人の距離を語っている

## bark at the moon

---

だめだ、今夜の月は悲しすぎる  
追いかけても届かない  
あの人に似すぎていて

## moaning morning

---

目が覚めると  
トーストとサラダとカフェオレが  
きみが存在していることを証明していた

パジャマについた長い髪の毛  
それを払い落として僕はひとりテーブルにつく

いつの間にか新しくなったカフェオレボウル  
君と一緒に買いに行ったやつはどこへ行ったんだろう  
そういえば、あれはいつ買いに行ったんだっけ  
どこへ買いに行ったんだっけ

きみの髪がショートだったことしか思い出せない  
白いセーターがすごく似合ってたことしか

カフェオレボウルの中にはカフェオレ  
黒と白が混ざり合ってゆれている

僕はそれを飲み干した  
涙とともに  
きみとの年月を

## 遠い恋文

---

あなたの目を見て  
高鳴りを覚えていたこの胸は  
今 あなたの背中に  
いらだちを覚えています。

そして私は 冷たいぬくもりの中  
時というものの持つ魔力に  
涙せずにはいられないのです。

## リズム

---

あなたがくれたのは  
陽だまりのような温もりと  
凍えるような孤独の欠片

あなたの笑顔を見るたびに  
あたしはあなたを見失ってく

手を伸ばせば  
手のひらには  
せつなくなるよなリズムが乗って

背中に張り付いた  
あなたの鼓動は  
どんなメロディーよりもやるせない

あなたの肩に触れるたび  
いらだちだけが募ってく

あなたが見ているのは  
私の目に映るあなたの目

私に見えているものが  
あなたにも見えればいいのに  
私が感じているものが  
あなたにも伝わればいいのに

でも、あなたに見えているものは  
あなたの秘密にしておいて  
きっと泣いてしまうから。

# 水

---

考えたくないよ  
君を生きかすために  
渴きを潤すために  
君にあげた水だったのに

それが君の火を消してしまったなんて

それが君を溺れさせてしまったなんて

## possession

---

君は僕の見たいものだけが見えてるらしい  
君は僕の欲しいものだけを持ってるらしい  
そして君は自分のことが嫌いらしい

それなら

俺がお前をもらってやるよ  
俺がお前になってやる  
お前は俺の中で泣けばいい  
自分が嫌ってた自分が  
どんなに美しかったかを  
知ればいい  
どんなに愛しいのかを  
知ればいい

俺の中で泣き叫べ、  
俺がそうしていたように。

## twinkle, twinkle poor little stars

---

輝く星の明かりは  
あなたの心に灯りをともす

輝く星の明かりは  
いつもやさしく降り注ぐ

やさしく降り注いだ光は  
かなしい影も落としてく

光があれば影が  
影があれば光が

ふたつは離れたくても離れられなくて  
ふたりは決して同じものにはなれなくて

この星の落とす光の下  
あの子は今日も泣いている

この星の作り出す影の下  
あの子は今日も泣いている

## unconnected

---

そうさ  
君と僕とは違う人間  
名前も顔も持ってるモノも  
何もかもが違うんだ  
たまたま頭の中身で  
重なるところがあったってだけで  
それは同一を意味しない

僕はカン違いしていたんだよ  
一致と同一を  
君は知っていたみたいだけど  
ほら、そこからしてもう違う

君と僕とは違う人間  
偶然いくつかの要素が合致する  
完璧に独立した別のもの  
そう考えないと泣いてしまいそうだ  
僕は一致に浮かれていたけど  
本当は同一が欲しかったんだから

でも君と僕とは違う人間  
名前も顔も立ってる場所も  
目の前にある山だって違う  
そう考えないと泣いてしまいそうだ  
僕の頬を優しく撫でる  
この柔らかな手の誘惑に負けてしまいそうだ

## 蜂蜜の中の凶器

---

ひとしきり笑いあった後にやってくる  
ふわりと心地好い沈黙

こら。  
お前、今誰のこと考えてた。

## 優しい手

---

優しい手

限りなく暖かいけど、何も与えてはくれない手。

私を打ちのめし

私を癒し

私を悦ばせ

私を悲しませ

私のすべてを包み込み

私に何も残さない

優しい手

何も与えてはくれないけど、限りなく暖かい手。

あなたの手。

## wave

---

あなたに近づくたび  
あなたと話をするたび  
あなたが笑うたび

私は海にいる気分になる

波打ち際に立って  
波が来るのを待って  
波が来て  
去って行って  
足元の砂が抉れて行って  
平衡を欠いて  
倒れそうになって

急に怖くなる

あの感覚に似た感じがする

あなたの吐息に中てられて  
私は平衡を欠いて  
ここがどこかも忘れてしまって。

## 道ゆき

---

僕らが目指すのは どこでもないところ  
この道の先のその先の  
はるかかなたに見えるところ  
おぼろげにしか見えないけれど  
僕はそこを知っている  
そこがどんなにすばらしいのかも  
昔もしかしたら  
そこに住んでいたことがあるんじゃないかってくらいさ  
どのくらいかかるかもわからないけど  
どうやったらそこに行けるのかもわからないけど  
僕はそこへ行くつもり  
いつか必ず行くつもり  
この道の向こうの先のその先の  
はるかかなたの遠い場所  
きっと僕を待つ何かがあると信じて

## perfect world

---

この花が咲く頃には  
私は知り得ているのだろうか  
全てを

この花が咲く頃には  
私は持ち得ているのだろうか  
希望を

花が開く  
その静かな瞬間を  
私は夢見ながら待ち続ける  
この固い蕾の中身が  
あざやかな世界であることを  
私は夢見ながら待ち続ける  
その静かな瞬間を  
完璧な世界の訪れを

この花が咲く頃には  
私は知り得ているのだろうか  
明日を

この花が咲く頃には  
私は気づいてしまうのだろうか  
時を

この花が枯れてしまう時を。

ondo

<http://p.booklog.jp/book/73058>

著者：アママラタスク (@amatasu)

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/amatasu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/73058>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/73058>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ